



「色ふかくつつじしづもる山原」

夏向ふ風の光りつつ来る」

北原白秋

北原白秋は明治十八年、福岡県柳川市の旧家に生まれた。明治四十年の夏、「五足の靴」の旅で本県を訪れた後、明治四十二年に処女詩集『邪宗門』を発表して以来、詩人、歌人、童謡作家として多彩な活動を続けた。昭和十年の五月には、三菱重工長崎造船所から所歌制作の依頼を受けて来崎し、雲仙にも訪れた。雲仙つつじが満開の季節、宿泊した旅館で詠んだ十二首の中の一首が次の歌である。

色ふかく つつじしづもる 山原

夏向ふ風の 光りつつ来る

長崎・佐世保の「白秋会」と、白秋が当時宿泊した旅館の協力によって建立された碑には白秋の門下生である島内八郎氏の筆による歌が刻まれ、昭和五十二年五月に長男隆太郎氏も招かれて除幕式が行われた。